第9回

作・佐々木守　え・岡本颯子

前回までのあらすじ

古代の忍者は志能便と呼ばれていた。六世紀の終り、聖徳太子に仕えた忍者に「鳥」と呼ばれる男があった。聖徳太子が摂政となり推古女帝のもとで実権をふるいはじめるにあたって、この「鳥」の活躍はめざましかった。

しかし、その「鳥」の忍法の師「親鳥」は海を渡って来た女忍者と共に聖徳太子の手にかかって果てた。その時「親鳥」が「鳥」に形見として渡したのは金色に輝く十字架であった。もちろん、その十字架のもつ意味については「鳥」は何一つ知らなかった。「鳥」の目的はただひとつ、蘇我氏によってほろぼされた大伴氏を再興したいということだけだった。「鳥」はその大伴氏の子孫だったのである。

聖徳太子もまた、蘇我氏を滅したいと念じていた。蘇我を滅し、日本に天皇家の確固とした地位をきずくこと、それが聖徳太子の願いだったのである。

だがしかし、「親鳥」の死により「鳥」は聖徳太子のもとをはなれて、ひとり熊野山に身をかくした。一方聖徳太子もついに蘇我氏を滅すことはできず、蘇我の勢力をみとめたまま、摂政としての政治をつづけていった。

この第二部は、それから約五十年の後にはじまる。聖徳太子はすでに死に、蘇我馬子もこの世になく、時代は皇極天皇のころ、権力をふるうのは蘇我蝦夷とその子入鹿である。そして、熊野山に入った「鳥」は、山の娘との間に「若鳥」を生んで死んだ。

はじめに…　この物語を読むために、次の系図をまず頭においてほしい。

聖徳太子——山背大兄皇子

(34)舒明天皇
(35)皇極天皇（女帝）
　——(38)中大兄皇子（天智天皇）
　——(40)大海人皇子（天武天皇）

蘇我馬子——蝦夷——入鹿

第五章　忍者・弓月

（一）

黄色い落葉が風に舞っている。

杉、松、樫などの巨木が、強い風にうなりを上げてゴオッゴオッと狼のようにほえていた。

六四三年、皇極三年十月、熊野山中はすでに冬の初めといってよかった。何十年、何百年人間の入ったこともない原始林は、つたがからみ、雑草が生い茂り、昼もなおうすぐらいほどであった。

「寒い」

三成はそういって着物のえりをかきあわせた。背中の矢をもう一度し

っかりとゆわえ、腰の剣をぬいて、バサッバサッとからみつくつたをきりひらきながら、三成はいったいこの原始林はどこまでつづくのだろうと、ふっと心細くもなった。

この山に入ってもう三日になる。夜は飢えた狼の遠ぼえにおののき、昼は果てしない原始林との斗い——さすが勇敢な三成も、もうなげ出してかえりたくなる。

「山背大兄王子がおっしゃった鳥などというものが、ほんとに、こんなところに住んでいるのかな」

三成は主人をちょっと疑ってみる。

「父君の聖徳太子が亡くなられて、すっかり気がお弱くなられた……」

ほっとため息がもれる。三成は聖徳太子のころから家来としてつかえているので、山背大兄王子の子どものころからよく知っている。

「小さいころはあんなにやんちゃなお方だったのに……」

推古天皇が死んだあと、三成は当然山背大兄王子が次の天皇になれるものと思っていた。ところが蘇我蝦夷と入鹿が反対して舒明天皇が第三十四代の天皇となった。舒明天皇が死んだあとこそはと祈ったのに、またまた蘇我親子の反対で、舒明天皇の皇后が皇極天皇となった。

「なにも今さら、女を天皇にしなくても、山背大兄大王という立派な方がいらっしゃるじゃないか」

三成はくやしくてたまらない。主人思いの三成であった。だから、その山背大兄王子が「熊野山中に住む鳥という男をたずねてくれ」といったときは、すぐさま「はい」と元気よく返事をしたのだが……

さて、それにしてもこの山は、深く、広く、暗すぎる。こんな所に人間が住めるものか、と思ったちょうどその時、天にそびえる原始林の梢から梢を鳥のように飛んだ黒い影があった。

「あっ！」

それは鳥ではなかった。あんな大きな鳥はいない。鳥のような人間だ。

三成は思わず叫んだ。

「まってくれ！」

そのとき、パラパラッと小さな鉄

の針が、杉の梢から、ものすごい勢いで降った。
はっとして、身をさける。
危い所だ。あれにあたったら、身体中はりねずみにされてしまったろう。
「帰れ！」
どこからともなく声があった。
「ここは人間のくる所ではない！」
それはまだ若い声であった。
「鳥か！」
三成は叫んだ。
「鳥は死んだ」
若い声が答えた。
「なに、死んだ？」
「帰れ！　鳥はいない！　このますぐ帰れ！　さもなければもう一度、今度こそ確実に貴様の身体へ鉄の針をうえつけるぞ」
姿は見えない。声だけが原始林にひびく。
「まってくれ。おれは山背大兄王子の使いで来たのだ！」
「知らん、そんな奴は。帰れ、今すぐ」
「知らぬはずはない！　山背大兄王子は聖徳太子の子どもだ！　そういえばわかると」
「知らぬ。山背大兄王子も聖徳太子も知らぬ」
「まってくれ」
とたん、ピュッピュッ、肌を刺す木枯しの如き音が三成のまわりで起った。
みよ、三成の足元に、今、その足だけをのこして、大地はするどい針の列で縫われているではないか。
「今度は、貴様の足の甲だ！」
「ま、まってくれ！」
三成は、思わず絶叫した。くそっ、こんな山の中まで、殺されに来たんじゃないぞ。
とつぜん、木々の間に女の声がした。
「弓月……弓月」
「おやめなさい、弓月」
そして、三成は見た。
欝蒼と茂る原始林の中から、長い黒髪を風に吹かせて、一人の年老いた女が現れるのを――。

（二）

森の中の小さな小屋であった。
しかし、太い材木をつたでしっかりと結びつけたその小屋は、よほど頑丈に出来ていると見えて、夜のものすごい風にもびくとも動かない。
その小屋の、チロチロと燃えるほだ火をかこんで、三成はいま二人の人間に会っていた。
かたく口をつぐんだ、りりしい顔立ちの若者と、その母である。
「都では、蘇我の蝦夷と入鹿が我が物顔にいばりちらし、聖徳太子亡きあとはまるで天下に蘇我一族以外の人間はいないかのような

ふるまいです。天皇に相談なく政治のことは勝手にきめ、蘇我に反対する大臣たちを殺し、あろうことか、自分たちの墓をみささぎと呼んで、天皇と同じになろうとたくらんでいるのです」

三成は必死になってしゃべっている。たずねて来た「鳥」がいない以上、何とかしてこの若者をつれて帰りたかった。さっき原始林でみた、あの身がるさと、するどい針の力、それだけでも山背大兄王子の力強い味方になってくれるにちがいない。第一、「鳥」は死んでいましたと、このおれがスゴスゴ帰れるもんか。

しかし、この「鳥」の息子だという若者はつめたい奴だ。

「ことわる」

と一言いったきり、あとは唖のように黙っているだけではないか。

「弓月」

母親が口をひらいた。若者の名は弓月というらしい。

「弓月、いっておあげ。聖徳太子は父上もお世話になった方です。そのお子の山背大兄王子の味方になって、御恩返しをするのです」

「いやだな」

ポツンと弓月がいう。

「おれは、母上をこの山の中において、都へ行く気など、全然ないな」

「弓月殿」 三成は大サービスで「殿」をつけて呼んだ。「弓月殿、しかし山背大兄王子は、今日あすにも蘇我親子のために殺されるかもしれないのです。たのむ、私と一諸に来てくれ」

「いやだ。おれには関係ない」

弓月はそういうと、ごろりと横になった。

「寝るぞ、おれは」

そして、すぐに高いいびきをかきはじめた。

「三成様、せっかく来ていただいたのに申しわけありません」

母親は長い髪の毛の顔を深々と垂れた。

「鳥は死んだ。だから、おあきらめ下さいと、山背大兄王子にお伝え下さい」

三成の目にはじめて涙がわいた。都の斑鳩の宮で、ひっそりと暮らす山背大兄王子の姿が目にうかんだ。ひとりでも味方がほしいときなのに………。

「しかたござらん」

三成はしずかに目をとじた。

母親はそんな三成をじっとみていたが、何か決心したように、すっと立ち上ると表へ出ていった。

三成の口から、長いため息がもれた。
と、その時、表で、風にまじって、長い女の叫び声がおこった。
ねむっていた弓月がはっと身を起した。一瞬弓月は表へとび出した。風のようにすばやい身のこなしであった。
三成もつづいてとび出した。
「あ！」
思わず叫んだ。
風うなる原始林の中で、弓月はぐったりとなった母親をだき上げているではないか。
「どうなされた」
三成はかけよった。みると、母親は自らの首に短剣をつきさして死んでいるのだ。
弓月は燃えるような目で三成をにらんだ。
「お前が殺したのだ！　お前が来たから母上は……」
弓月の目は猛獣のように光った。とみるやいきなり母親の死体を目よりも高くさし上げて、えいっとばかり小屋に向ってなげつけた。
「あっ」

何をする、といおうとして三成の舌はこわばった。
ものすごい力で空をとんだ母親の死体は、空中で、パアッと燃え上ると、そのまま、小屋もろともまっかなほのおを吹きあげたのだ。
弓月は、じっと燃える小屋と母親をにらんでいた。その後で三成はあまりの驚きで身をふるわせていた。
ボソリと弓月がいう。
「みやこへ、いくよ、おれ……」

（三）

馬は走った。
熊野から飛鳥(あすか)の都へ向って、馬はひた走りに走った。たづなをとる弓月、その前で、たてがみにしがみつきながら三成は生きた心地もなかった。
何という若者だろう。まるで、馬を自分のこころのままに走らせている。これほど、馬にのるのがうまい男を、三成は都でも他に知らない。
そんな三成の気持を知ってかしらずか、弓月は馬の腹をける。
馬は走る。
そのひずめの音の中で、しかし三成はほっとする。この弓月をつれていけば、山背大兄王子はどんなに喜ばれることだろう。母を亡くした弓月には気の毒だが、これでおれはまあまあ役目を果たせたというものだ。
馬は奈良盆地に入って、一路飛鳥をめざした。早く行け！　早く！　斑鳩の里へ！　こうなると三成は、

一刻も早く王子の喜ぶ顔が見たかった。

この弓月とおれと力を合わせて、きっと王子を守ってみせる。蘇我入鹿め、今に見ていろ。

と、とつぜん、飛鳥の都の方から、わあーっという叫び声が風にのって聞こえた。つづいて馬が数騎走る音と、たたかいの声がわきおこった。

あっ、あれは——、何と、それは王子の住む斑鳩の里へ向っているではないか。

しまった。おれの留守をねらって入鹿の奴！

「弓月、入鹿が王子を攻めているぞ！」

「なにっ」

弓月の顔がひきしまった。ムチが馬の尻で鳴る。風のように、馬は走り出した。

時に西暦六四三年十一月一日。蘇我入鹿の軍勢は、巨勢徳太、土師娑婆連の二人を大将として、山背大兄王子を亡きものにせんとして聖徳太子ゆかりの地斑鳩の里を攻めた。

日本の政治を意のままに動かそうとする蘇我蝦夷・入鹿親子にとって、聖徳太子の子山背大兄王子は目の上のたんこぶだったのである。

四十人あまりしか家来のいない山背大兄王子は、蘇我軍の敵ではなかった。巨勢徳太、土師娑婆連は叫ぶ。

「王子を殺せっ！　王子を殺して首を挙げよ。重き恩賞をとらせるぞ！」

「わあーっ」

矢がうなり、剣が光る。

勝ちに乗じて蘇我軍が、斑鳩の宮に突入しようとしたときだ。とつぜん、軍の背後に混乱がおこった。

ギャア、ぐうっ、奇妙な絶叫と共に一人また一人、兵が倒れる。その首には、いずれもキラリと光る鉄の

水木しげる傑作短篇集

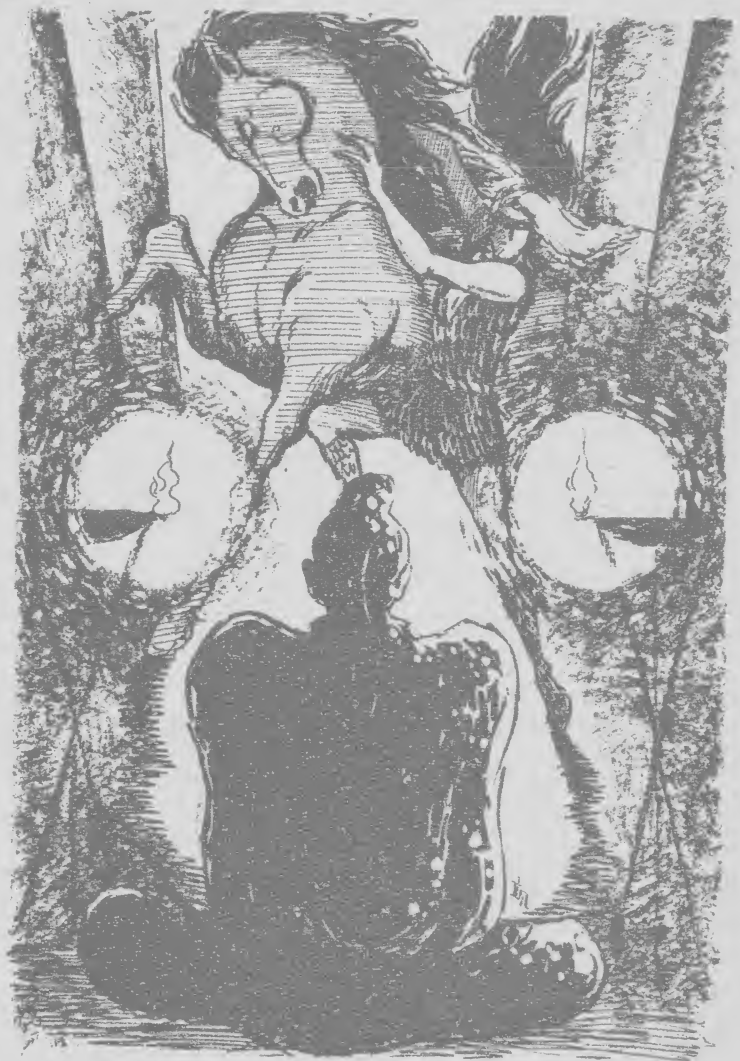
第1集　不死鳥を飼う男
第2集　手袋の怪
第3集　釣り落した魚

水木しげる傑作長篇
幻想ロマン・シリーズ

猫姫様
地獄流し
古墳大秘記
呪われた村

ホームラン文庫・刊
定価　各巻二〇〇円
〒　五冊迄七〇円
現金で御送金下さい

申込先
東京都千代田区神保町一の55
株式会社　青林堂
ホームラン係

針がつきささっているのだ。
土師娑婆連はびっくりした。
「どうしたァ」
わめいてふりかえった。と、その胸に、ズン！　一本の矢がつきささった。
「貴様、よくも王子を！」
かけつけて来たのは、三成であった。
「バカ者……　おれが死んでも、王子はまもなく、首をはねられるぞ」
土師娑婆連はそういうと、ガクリと首をたれた。
「王子さまァ」
三成は叫んだ。そのまわりに巨勢徳太が指揮する蘇我軍の矢が雨の如くふりそそぐ。
「王子さまァ」
瞬間、三成は、自分のかたわらを黒い影が一つ、風のようにとんで斑鳩の宮にかけこむのを見た。
それは馬にのったままの弓月であった。
「三成、宮に火をつけろ！」
弓月の声だけが残った。三成ははっとした。弓月は何を考えているのか。聖徳太子が建てられたこの斑鳩の宮を燃やせだと？　そんなことができるか。
だがしかし、このままにおいて蘇我のやつらにふみにじられるよりは……。三成は決心した。勇気をふるいおこして剣をぬくと、蘇我軍の中へ斬りこみ、弓月のあとを追って宮の中へ入った。
一方、弓月は馬のまま、宮へとびこむと、そのまま、王子の部屋までかけぬけた。山背大兄王子は、奥の部屋で、目をつむっていた。それは、はやすべてをあきらめた人のようであった。馬のままとびこんだ弓月をみて王子は静かにきいた。
「わたしの首をはねに来たのか」
弓月は答えず、剣をぬくと、今自分ののって来た馬の首をバサリと斬り落とした。

ザアッ！　噴水のように吹き上げる血の中で弓月はぶっきらぼうにいった。
「逃げるんだ、王子。おれの背につかまれ」
そのとき、三成によってつけられた火は、すでにもうもうと斑鳩の宮を紅蓮の炎でつつみはじめていた。

（四）

三日後、飛鳥の都には、ついに山背大兄王子が死んだというしらせが広まった。やけおちた斑鳩の宮の王子の部屋から骨がみつかったというのである。
その話を三成がきいてニンマリと笑った。

「弓月のやつ、仲々やるわい。馬の骨だともしらないで、蘇我のバカ者めが――」

三成は、食糧を入れた袋をかついで、生駒山の坂をのぼった。

生駒山――そこに山背大兄王子がかくれているのだ。山の奥深い谷川のほとりに大急ぎで小屋がつくられた。斑鳩の宮とはくらべものにならない粗末な山小屋、それが山背大兄王子のかくれ家であった。

その夜、王子は何か考えている風であったが、河原でねていた三成と弓月を呼んだ。

「御用でございますか」

「うむ、今はお前たちのおかげでどうにか助かったが、そのうち必ず蘇我の奴らは私のことを知るにちがいない」

「御安心下さい。私とこの弓月が必ずお守りいたします。」

「有難とう。しかし、奴は大軍じゃ。いくらお前たちが強くても人数にはかなわぬ」

「どうしろといわれるのですか」

「私は、以前、父聖徳太子からきいたことがある。遠い北の国、能等国にわが大和朝廷の秘密の軍団があると。」

「えっ、能等の国に、秘密の軍団が?」

能等国――現在の石川県能登半島のことである。

三成にはきいたこともない国の名前だった。しかし、王子ははっきりという。能等に大和朝廷に味方する秘密の軍団があると――。

「いってくれぬか、その方たちの一人。」

はじめて聞く、幻の軍団、その名は能等軍団――。

弓月が、立ち上った。そしてあいかわらずボソリといった。

「三成、お前は王子を守れ。おれは能等へ行く」

（つづく）